

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 10 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24501269

研究課題名(和文)文化財管理における美術品用語事典の作成

研究課題名(英文)The create of art terminology encyclopedia in japanese cultural assets management

研究代表者

河内 晋平(kawachi, shimpei)

東京藝術大学・その他の研究科・研究員

研究者番号：00554982

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、日本の文化財について使用されている用語を収集・体系化し、それら用語に関する典拠情報を作成する事である。現在、文化財管理における資料名称や品質形状等の用語については、各文化施設の学芸員や研究者により様々な表記・使用方法が存在している。そのため、複数施設間で情報共有する際は、互いに使用する用語の確認が必要な現状にあり、1つの資料情報を共有するだけでも非常に多くの時間を要している。このように、文化財管理における美術品にどの用語を適用するか、俯瞰的に参照出来る典拠情報の存在は非常に重要な基盤になる。

研究成果の概要(英文)：This study is performed to strengthen the systematic of term about japanese cultural assets and describe an these authority source. Currently, The term of quality configuration and nominal has a various notation and instructions. In case of share with multi-facility, they need to confirm use a term and that needs a lot more time. Be that as it may, these important merit of this study is that it can reference a authority information comprehensively.

研究分野：工芸・情報

キーワード：美術史 情報システム 図書館情報学 ディレクトリ・情報検索

1. 研究開始当初の背景

文化財管理における資料名称や品質形状等の用語については、各文化施設の学芸員や研究者により様々な表記・使用方法が存在している。そのため、複数施設間で情報共有する際は、互いに使用する用語の確認が必要な現状にあり、1つの資料情報を共有するだけでも非常に多くの時間を要している。これまで、文化財の情報に関する記述方法は、各文化施設の中での規則や学芸員、研究者の意向に沿う形で決定され適用されてきた。しかし、昨今のデジタル技術を使用した文化財管理のデータベース開発時において、各用語の使用方法などについての議論が活発に行われている。例えば東京国立博物館が使用しているデータベース(以下、ProtoDB)では資料情報の属性として、「識別・特定(資料番号、名称など)」「物理的特性(品質形状、材質、員数など)」「履歴(制作、来歴など)」「関連・参照(権利、文献、画像など)」という34種の属性を設けている。(東京国立博物館 博物館情報処理に関する調査研究プロジェクトチーム「ミュージアム資料情報構造化モデル」)しかし、ProtoDBは名称や品質形状などの情報の管理については、それまで使用されていた管理台帳などの用語を使用しながら、情報整理の際に担当している学芸員や職員、研究者の判断にゆだねられている。また、博物館、美術館などは多種多様な資料を所蔵し、業務の中で発生する様々な用件にあわせた管理情報項目を使用しなければならず、多くの細分化された使用用語が存在する。現段階でどのような用語が使用されているのかを参照できる体系化された典拠情報がないために、各施設で使用されている用語がどういった文化財の情報をさしているのかがわかりづらい状況がある。そこで、応募者らは今回の申請に先立って、文化庁が公開している国が指定している文化財のデータベースや国宝重要文化財リスト、指定文化財目録で使用されている名称用語の一部を収集し整理作業を行った。その一部が表1に示したものである。その結果、一つの用語に対して予想以上に多くの細分化された品質形状が使用されている事が確認できた。例えば表1の絵画分野では、「絹本(けんぼん)」という用語の中でも、「絹本着色(けんぼんちやくしょく)」や「絹本墨画(けんぼんぼくが)」「絹本淡彩(けんぼんたんさい)」「絹本金彩(けんぼんきんさい)」など絹本といっても多くの使用方法がある。工芸分野においても「金銅(こんどう)」という用語では「金銅種子装(こんどうしゅじそう)」のほか「金銅荘(こんどうそう)」「金銅装(こんどうそう)」という読みがなに関する音は同じでも漢字が異なるという用語も確認できた。また、関連語についても参照できるよう体系化することが必要である。例えば工芸分野の漆芸に関する品質形状では、「黒漆(くろうるし)」という語には「黒漆塗(くろうるしぬり)」

という技術的な用語を含めた記述方法がある一方で、「黒塗(くろぬり)」という素材の名称が使用されていない制作技法に関連した記述も存在する。このように関連する用語についても多角的に参照できるような体系化を行うことが必要になる。

また、各施設で運用が広まっている文化財管理データベースの開発や改良の際にも情報共有の基となる用語の典拠情報は非常に有益であり、必要となっている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本の文化財について使用されている用語を収集・体系化し、それら用語に関する典拠情報を作成する事である。文化財管理における美術品にどの用語を適用するか、俯瞰的に参照出来る典拠情報の存在は非常に重要な基盤になる。

3. 研究の方法

(1)各施設の用語使用例について情報の収集を行い、随時整理を行うためのデータ形式をそろえる作業を行う。情報の収集対象の機関のそれぞれの文化財件数は絵画、書跡・典籍、工芸を中心としたデータ数で文化庁が公開している国指定文化財等データベースや国宝重要文化財リストと指定文化財目録の約6,917件、東博図版目録や全文データベース、protoDBのデータから約60,000件、東京芸術大学大学美術館(東京芸術大学の絵画分野については東洋真蹟と東洋模本)データベースの約10,000件の計77,000件である。非常に多くの用語が存在することに加え、デジタルデータになっていない情報も対象とするため、それら資料に関しては手入力による情報収集作業が必要になり、研究初段階ではデータ収集を中心に行う。情報収集を行いながら随時データの整理を進める上で、収集したデータの形式をそろえる作業を主に行う。その後、担当分野の研究分担者や連携研究者、研究協力者と共同で各分野の用語について関連語も含めた整頓のための検討を行う。本研究で計画している用語集(シソーラス)の内容は品質形状に関する名称、ふりがな、アルファベット表記、英語表記である。まずは関連語や同様の単語を含めた用語をコンピュータによる自動化作業で分類し、その後それらをもとに用語の体系化への検討と再確認作業を行う。情報の収集には代表者の河内晋平が中心となり進める。まずは文化庁の国宝重要文化財に関するリストと指定文化財目録からの情報を収集する。データ整理やデジタルデータでの収集が出来ないものに関する入力作業には、必要に応じて研究補助を雇いデータ入力を行う。

(2)研究中段階には初段階に収集し、整理した情報をもとに専門分野の研究者とともに再確認作業と体系化の作業を進める。特に工芸分野については技法や素材など複雑な用

語が存在するために、まずは二段階に分けて作業を進める。第一段階は同じ用語や漢字を使用しているものの整理を行い、第二段階として関連語などの用語の整頓を行う。その後、整理した情報のなかでふりがなや英語表記など情報の足りないものに付いての情報の追加を行う。またデータの情報学的アプローチによる成果情報の公開・活用方法についても検討する。また、本研究の整理が進行した状況で、他の文化財保管施設へのコンタクトをとり、実際に本研究の成果を使用する際の問題点等について出張調査を行う。

(3)研究後半段階では、用語情報の追加作業を引き続き行い、同時に体系化の作業を進める。全データが体系化できた段階で各担当分野の研究者とともに関連語句などの関係も含めて再度確認作業を行う。同時に多くの文化財情報を取り扱う施設や研究機関などへの公開を前提とした web 等によるデータ構築においても、そのための環境の整備を進め、実際に試運用を行う。試運用に関しては個人ユーザーでも使用可能な安価なデータベースシステムを使用することを計画する。美術品を扱う施設での学芸員や研究者への公開にあたっては広く活用が期待できる方法を検討する。

本研究で作成する用語集(シソーラス)が各博物館や美術館での業務の中でどのように使用することができ、他の分野において今後どういった情報が必要なのかについて web データベースの運用を行いながら調査を行う。

(4)今後

試運用を行いながら、他の施設でも使用できるように情報の精度を上げる作業を引き続き行う。現状では web データベースの編集に関しては研究代表者の許可がないとできない状態であるが、ID とパスワードを発行することによる国内の美術品を管理する多くの職員や研究者が使用しながら常に成長していくデータベースの形を目指していく。

そのためにも、不特定多数による情報の改変や更新作業の中で問題がないようにシステムの精査と構築が必要となる。典拠情報や履歴を残すことによる情報の透明性の確保は使用する上での利便性とのバランスを考えて進めていく必要がある。重要な点としては、どういった業務や状況において本データベースを活用することが最良かという指針をわかりやすく構築することである。

4. 研究成果

本研究で最大の作業ボリュームがあった用語収集について、約 7,600 語の収集と整理作業を完了している。分野としては、金工、ガラス、絵画、書籍、考古資料、歴史資料、建造物である。収集の際には用語、技法、分野、員数、素材というカテゴリーを設けた。用語の収集元としては、東京藝術大学美術館

収藏品目録、東京国立博物館、奈良国立博物館の収藏品目録やデータベース、文化庁監修国宝・重要文化財大全等を使用した。

収集した用語の整理作業と使用にあたってのフィードバックを反映するために、wiki を使用したデータベースを構築した。

データベースのカテゴリーとしては、収集した用語から、

- ・分野(10 項目)
- ・用語(5,021 項目)
- ・素材(152 項目)
- ・技法(323 項目)
- ・用語種別(2 項目)

としている。収集した用語から上記のカテゴリーを設定しているが、今後試運用をしていく中で情報の追加と改変が必要になると考えている。

ただ、実際の運用にあたっては、用語の精度をより向上させることが必須であり、研究最終年では用語の再チェック作業を行った。用語の数とそれぞれの用語より派生する類義語などの体系化には自動化での作業が困難な部分が多分に存在し、想像以上の時間がかかることがデータベース構築時の整理作業にて確認できた。そのために本研究終了後も引き続き内部での運用を継続しながら、外部の施設における運用テストを目標に作業を進めていくことになる。

ただ、本研究においては、多様な用語の存在が予想通りに確認でき、基盤となる用語の収集が完了していることから、今後より生産性のあるデータベース構築とその運用について検討できる現時点での研究結果は確認できている。

現状では web データベースの編集に関しては研究代表者の許可がないとできない状態であるが、ID とパスワードを発行することによる国内の美術品を管理する多くの職員や研究者が使用しながら常に成長していくデータベースの形を目指していく。

そのためにも、不特定多数による情報の改変や更新作業の中で問題がないようにシステムの精査と構築が必要となる。典拠情報や履歴を残すことによる情報の透明性の確保は使用する上での利便性とのバランスを考えて進めていく必要がある。重要な点としては、どういった業務や状況において本データベースを活用することが最良かという指針をわかりやすく構築することである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 1 件)

アート・ドキュメンテーション学会 第 6 回秋季研究発表会(2013 年 11 月 7 日)、跡見学園女子大学文京キャンパス 2 号館 M2302 教室 発表表題「文化財管理における美術品用

語辞典の構築」 発表者「河内晋平・嘉村哲郎」

〔その他〕

6. 研究組織

(1)研究代表者

河内晋平 (KAWACHI shimpei)
東京藝術大学 大学院映像研究科 研究員
研究者番号：00554982

(2)研究分担者

原田一敏 (HARADA kazutoshi)
東京藝術大学 学内共同利用施設等 教授
研究者番号：20141989

村田良二 (MURATA ryoji)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館 学芸企画部室長
研究者番号：50415618

(3)連携研究者

嘉村哲郎 (KAMURA tetsuro)
東京藝術大学 学内共同利用施設等 芸術情報研究員
研究者番号：90543710

(4)研究協力者

田良島哲 (TARASHIMA satoshi)
三輪紫都香 (MIWA shizuka)